

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材 施用技術	<p>○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p> <p>○緑肥作物利用技術 緑肥作物（ソルゴー等）を栽培し、作付け前にすき込む。</p>	2 t/10 a
化学肥料 低減技術	<p>○局所施肥技術 局所施肥により肥効率を向上させる。</p> <p>○肥効調節型肥料施用技術 被覆肥料等の利用により肥効率を向上させる。</p> <p>○有機質肥料施用技術 有機質肥料（油かす等）を用いた施肥体系とする。</p>	化学合成窒素量 ・春～初夏どり 夏どり 秋どり 5.2kg/10a 以内 ・冬春どり 14.9kg/10a 以内
化学農薬 低減技術	<p>○機械除草技術 除草機械により雑草（畦畔での害虫発生助長植物も含む）を駆除する。</p> <p>○生物農薬利用技術 生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。 ・生物農薬：B T剤(ハセンヨトリ、シイモジヨトリ、ヨウムシ)など</p> <p>○土壌還元消毒技術(ハウス) 土壌中の酸素濃度を低下させることにより土壌病害虫を駆除する。</p> <p>○熱利用土壌消毒技術(ハウス) 蒸気、太陽熱などの利用により土壌病害虫を駆除する。</p> <p>○光利用技術 光反射資材利用により害虫を忌避させる。</p> <p>○被覆栽培技術 被覆資材により有害動植物の付着を防止する。 ・防虫ネット(シイモジヨトリ、アザミヤ類)など</p> <p>○フェロモン剤利用技術 フェロモン剤の利用により害虫の大量誘殺や交信を攪乱させる。 ・リトルア剤(ハセンヨトリ)など</p> <p>○マルチ栽培技術 紫外線反射マルチ、生分解性マルチ、稲わら等利用により有害動植物のまん延防止する。</p>	化学合成農薬成分回数 ・春～初夏どり 9成分以内 ・夏どり 7成分以内 ・秋どり 10成分以内 ・冬春どり 12成分以内
その他の留意事項 客土による土壌改良や、輪作による作柄の安定を図る。 有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。 連作障害回避のため輪作に努める。 ネダニ防除のため、夏場1ヶ月以上湛水する。 収穫後の残さを適切に処分する。		